

板橋区野鳥の実態調査報告書
(IV)

平成14年3月

東京都板橋区

はじめに

「板橋区野鳥の実態調査」は、板橋区でみられる野鳥の生息状況を把握し、区民にその情報を伝え、さらに生態系に配慮した板橋区のまちづくりを進めるための基礎資料とするため、これまでに3回の調査を行ってきました。今回の調査は、板橋区の緑の骨格を構成する崖線樹林地に生息する野鳥を対象に行いました。

21世紀を迎え、自然環境やそれらのもたらす住環境の質について、区民の意識も格段に高まってきた時期に、板橋区の崖線樹林地の野鳥を通して現在を見つめ直し、今後の板橋区の豊かなまちづくりに、この調査結果を生かしていきたいと考えております。

本調査の実施にあたり、ご協力いただきました区民の方々、及び関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成14年3月

板橋区 土木部 みどりと公園課

目次

はじめに

I	調査目的	1
II	調査期日	1
III	調査地域	1
IV	調査方法	2
1	既存資料調査	2
2	現地調査	3
V	調査結果	5
1	鳥類相	5
1-1	崖線樹林地で記録された鳥類	5
1-2	鳥類相の変化	8
2	鳥類群集	14
3	繁殖状況	15
3-1	本年度の繁殖状況	15
3-2	繁殖状況の変化	24
4	越冬状況	25
4-1	越冬期の鳥類相	25
4-2	越冬期の経年変化	27
5	鳥類の生息状況からみた崖線樹林地の評価	29
	参考文献	33
	資料	34

I 調査目的

板橋区では、1982年度、1987年度、1992年度と過去3回、区内の鳥類調査を行ってきた。過去3回の調査は、板橋区の鳥類生息状況の把握を目的とし、区政に役立つ資料の蓄積に努めてきた。

第4回目となる本調査では、板橋区の緑の骨格を構成する崖線樹林地において、鳥類の生息状況を調査し、鳥類相を明らかにするとともに、過去の調査結果との比較を行い、その変化について考察する。また、野鳥等の生息地としての崖線樹林地を評価し、崖線樹林地保全のための基礎資料とすることを目的とする。

II 調査期日

現地調査は、繁殖期と越冬期に実施するものとし、以下の日程で行った。

繁殖期：2001年6月5、8日

越冬期：2002年1月10、11日

III 調査地域

区が指定する崖線樹林地2地区（図III-1）



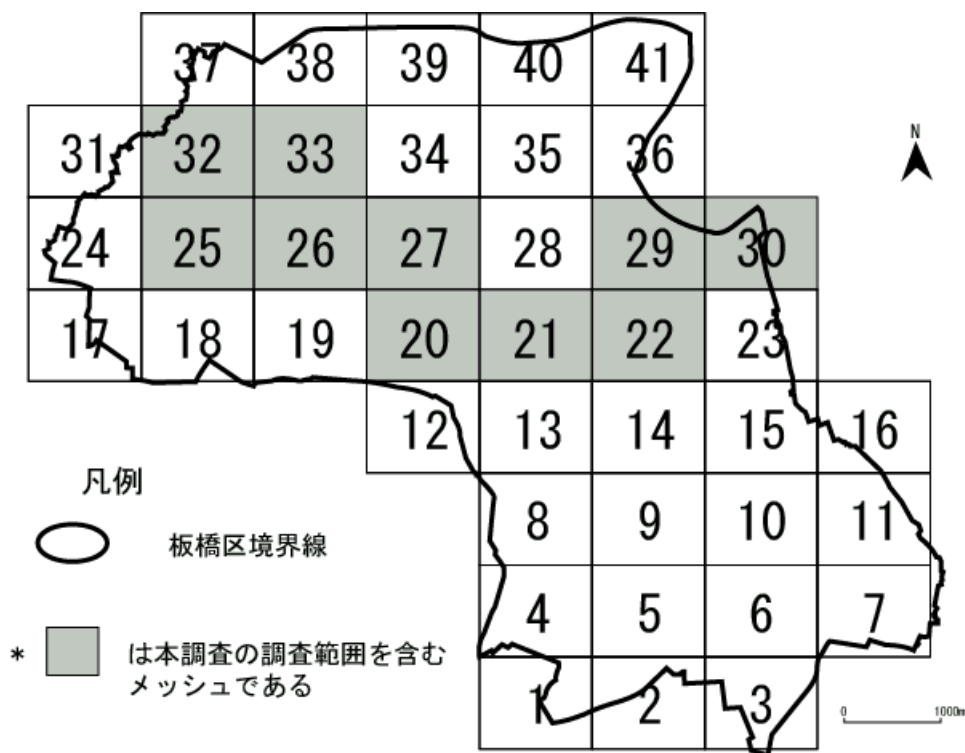
図III-1 調査地域

IV 調査方法等

1 既存資料調査

既存資料調査では、板橋区野鳥の実態調査報告書（板橋区 1983、1988、1993）や、文献資料等その他の情報により板橋区内の鳥類を整理し、現地調査結果と比較して、その変化について考察を行った。また、板橋区内の緑地などに係わる既存資料と、現地調査の結果から、野鳥の生息状況からみた崖線樹林地の評価を行った。

なお、本調査では崖線樹林地を対象として調査を行ったが、「東京都の鳥類繁殖状況調査報告書」（東京都 1998）等の既存の資料では板橋区内を地域標準メッシュ（東西 1.1 キロメートル、南北約 0.9 キロメートル）により区分しているため、これらの資料との比較を行う場合は、本調査結果を同様のメッシュに整理した上で検討を行った。本調査範囲に該当するメッシュは、図IV-1に示した。



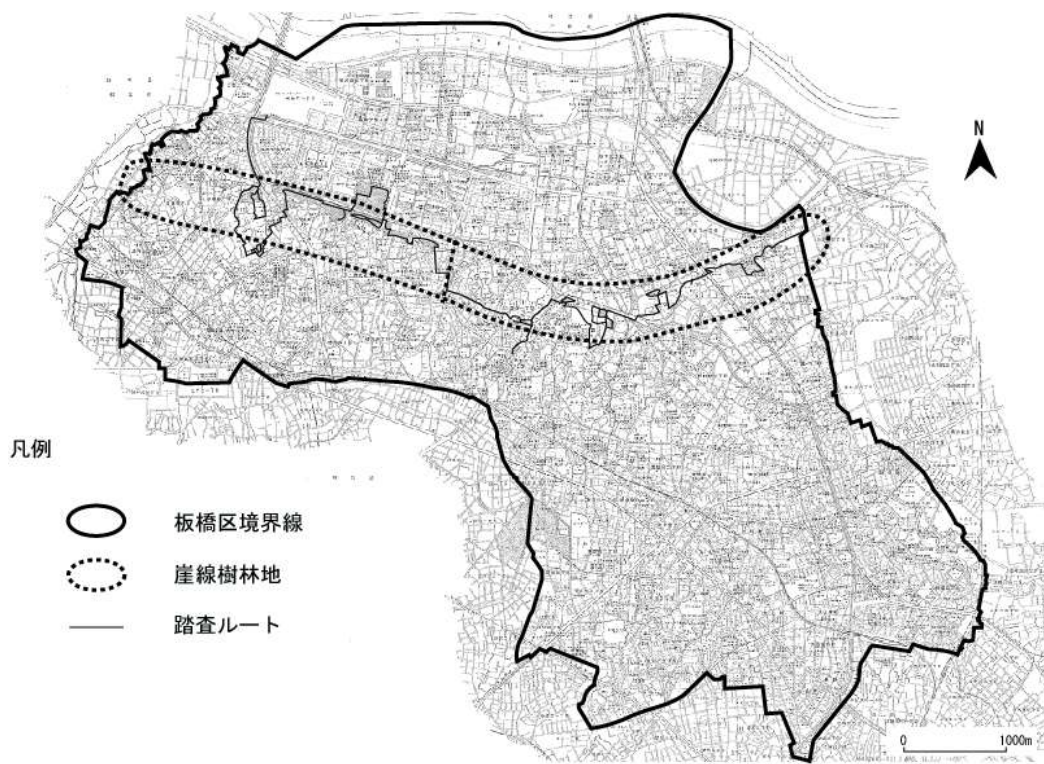
出典：板橋区野鳥の実態調査報告書（板橋区1993）を一部改変

図IV-1 調査メッシュ

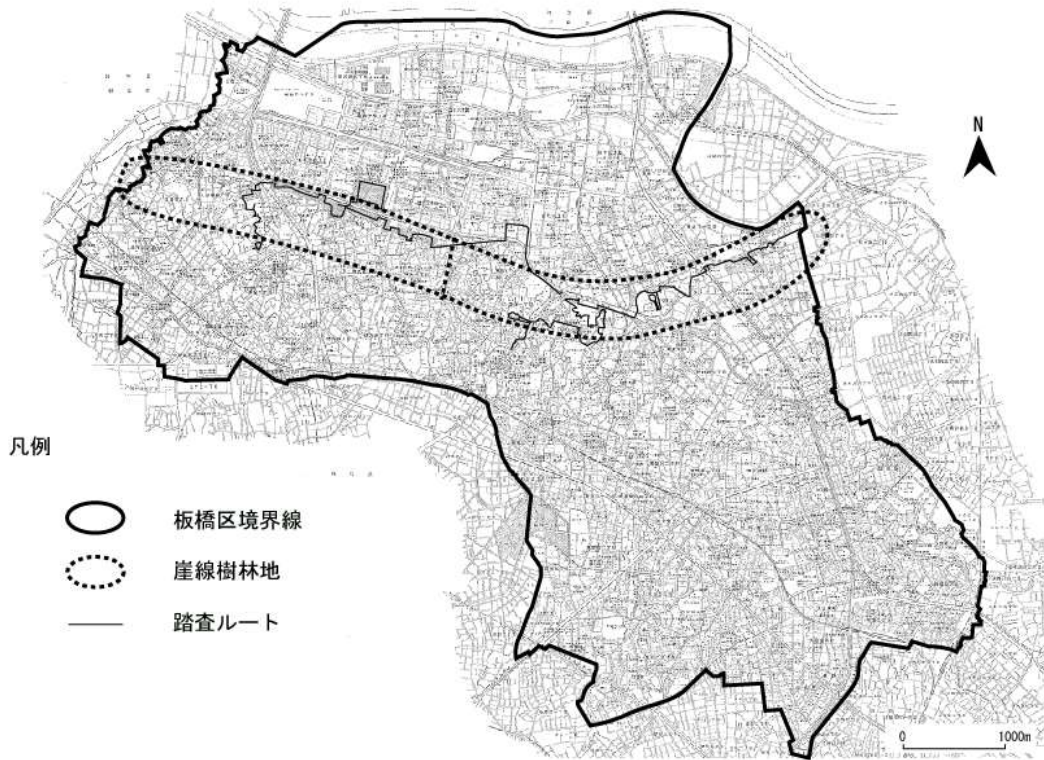
2 現地調査

現地調査は、図Ⅲ-1（前掲）に示すように崖線に分布する樹林を調査対象とし、東西2地区に大きく区分し、それぞれの地区において、鳥類の生息状況及び環境利用状況を記録した。調査は踏査によって行い、出現した鳥類の種、個体数の把握を行い、それらの個体が利用していた環境などを合わせて記録した。踏査ルートは、図Ⅳ-2、Ⅳ-3 に示す通りである。

調査にあたっては、調査員と補助調査員が一組となり、繁殖期と越冬期にそれぞれ各地区1日、合計2日間の調査を行った。



図IV-2 踏査ルート（繁殖期）



図IV-3 踏査ルート（越冬期）

V 調査結果

1 鳥類相

1-1 崖線樹林地で記録された鳥類

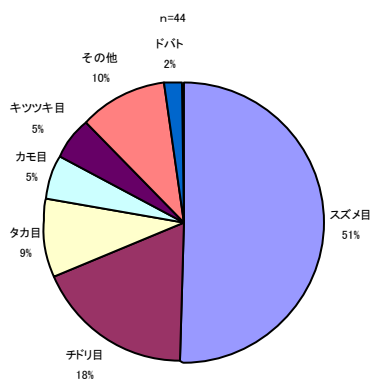
現地調査及び本年度分に該当する資料調査等で記録された鳥類は、10目23科44種（ドバトを含む）であった。表V-1には、出現状況と生息時期の区分である生活季節及び繁殖ランクを示した。この記録の中には、資料調査などで得られた調査地域外の記録も一部含まれているが、それらは分けて示した。

確認された鳥類の目別の構成をみると、図V-1の通り、スズメ目が半数を占め、チドリ目、タカ目、カモ目、キツツキ目が続いている。チドリ目の多くは、資料調査等により荒川周辺で得られた記録である。調査を行った崖線付近の環境は、主に樹林と市街地からなり、公園の一部に芝生や草地があり、畑が残っている場所もみられる。また、公園内などには小規模な池があり、カルガモの繁殖が記録されているが、多くの水鳥は北側を流れる新河岸川を主に利用し、時折、調査地域付近に飛来していたものとみられる。

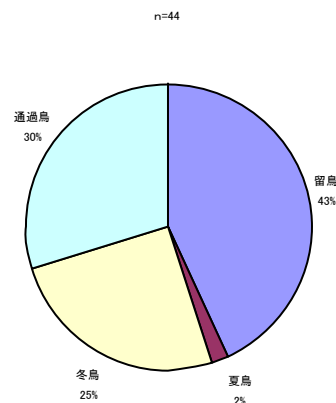
生活季節の割合は、図V-2の通り、留鳥、通過鳥、冬鳥、夏鳥の順になっている。留鳥は市街地に主として生息する鳥類が多く、通過鳥はシギ科、チドリ科が半数近くを占めていた。本調査で記録された夏鳥は、ツバメ1種であった。

本調査で繁殖が確認された種（aランク）は6種、繁殖の可能性が期待される種（bランク）は5種、合わせて11種（表V-1）が板橋区内の繁殖鳥類として挙げられた。

注目される点は、繁殖期に小形のタカの仲間であるツミが記録されたことや、コゲラの巣穴がみられたことである。これら樹林性の種の利用がみられるということは崖線部の樹林環境の質が向上したことをうかがわせる。また、冬期はオオタカが狩りを行っていたとみられ、越冬期での定着がうかがわれた。



図V-1 目別鳥類の割合



図V-2 季節別鳥類の割合

表V-1 崖線樹林地の出現鳥類

目	科	種	現地調査		資料等	生活季節	繁殖 ランク	
			繁殖期	越冬期				
ペリカン	ウ	カワウ	○	○		留		
コウノトリ	サギ	アオサギ	○			通		
カモ	カモ	カルガモ	○			留	a	
タカ	タカ	スズガモ			(○)	冬		
		オオタカ		○		冬		
チドリ	ハヤブサ チドリ	ツミ	○			留	c	
		サシバ			(○)	通		
		ハヤブサ			(○)	通		
		コチドリ			(○)	通		
		メダイチドリ			(○)	通		
		オオハシシギ			(○)	通		
		キアシシギ			(○)	通		
		ソリハシシギ			(○)	通		
ハト	カモメ ハト	タシギ			(○)	通		
		オオジシギ			(○)	通		
ホトトギス	カモメ ハト	ユリカモメ		○		冬		
		キジバト	○	○		留	a	
ブッポウソウ	ホトトギス	カッコウ			(○)	留		
キツツキ	カワセミ キツツキ	カワセミ	○			留	b	
		アオゲラ				留		
スズメ	ツバメ	コゲラ	○	○		留	b	
		ツバメ	○			夏	b	
	セキレイ	イワツバメ	○			留	c	
		キセキレイ				○	冬	
	ヒヨドリ	ハクセキレイ				○	留	
		ヒヨドリ	○			○	留	b
	モズ	モズ				○	留	
		ジョウビタキ				○	冬	
	ツグミ	シロハラ				○	冬	
		マミチャジナイ				○	通	
	ウグイス	ツグミ				○	冬	
		ウグイス				○	冬	
	シジュウカラ	コガラ				○	冬	
		シジュウカラ	○	○		○	通	a
	メジロ	メジロ	○	○		○	留	b
		アオジ				○	冬	
	ホオジロ	カワラヒワ	○	○		○	留	c
		シメ				○	冬	
	ハタオリドリ	スズメ	○	○		○	留	a
		コムクドリ				○	通	
	ムクドリ	ムクドリ	○	○		○	留	a
		オナガ	○	○		○	留	c
	カラス	ハシブトガラス	○	○		○	留	c
		ドバト	○	○		○	留	c
合計		10目23科44種	18種	23種	14種			

○：確認種 ()：調査範囲外のみでの記録
 留：留鳥 夏：夏鳥 冬：冬鳥 通：通過鳥
 a：繁殖を確認した
 b：繁殖を確認できなかったが、繁殖の可能性がある
 c：生息を確認したが、繁殖についてはなんともいえない

※：資料等は笹川（私信）の記録

地区別の記録（表V-2）では、東地区で繁殖期に16種、越冬期に22種、合計26種が記録されている。一方、西地区では繁殖期に15種、越冬期に20種であり、合計24種が記録され、やや東地区の記録種数が上回る結果となった。

両地区の記録種のうち、共通種は19種であった。東地区だけで記録された種は、カルガモ、ツミ、ユリカモメ、カワセミ、キセキレイ、モズ、マミチャジナイの7種、西地区だけで記録された種は、アオサギ、オオタカ、イワツバメ、シロハラ、コガラの5種であった（表V-3）。

表V-2 地区別で記録された鳥類の種数

	西	東
すべての記録	24種	26種
繁殖期	15種	16種
越冬期	20種	22種

※：笹川（私信）等の記録を含む

※：種数には、ドバトを含んでおり、カラス科の一種は除く

表V-3 地区別出現鳥類

	地区	
	西	東
各地区のみでの記録	アオサギ、オオタカ、イワツバメ、シロハラ、コガラ※	カルガモ、ツミ、ユリカモメ、カワセミ、キセキレイ、モズ、マミチャジナイ※
共通の記録	カワウ、キジバト、コゲラ、ツバメ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ジョウビタキ、ツグミ、ウグイス、シジュウカラ、メジロ、アオジ、カワラヒワ、シメ、スズメ、ムクドリ、オナガ、ハシブトガラス、オナガ、カラス科の一種	

1-2 鳥類相の変化

1) 板橋区内の鳥類相の変化

板橋区では、これまで鳥類調査を3回実施しているが、これらの調査では14目29科98種の鳥類が記録されている。

4回目にあたる本調査は、これまでとは異なり、板橋区の緑の骨格を構成する崖線樹林地を中心に、繁殖期にあたる6月と越冬期にあたる1月のみに調査を実施した。

したがって、板橋区全域を対象とした鳥類相の変化という項目は、今回の調査対象ではないが、本調査により、板橋区の鳥類相に、新たにツミが追加されたので（写真V-1）、ここに整理してみる。

表V-4にはこれまでに行われたすべての調査項目から記録された出現鳥類を示した。第1回調査では64種、第2回調査では67種、第3回調査では80種、本調査では44種記録され、新たに一種加わったことで合計14目29種99種が記録された。しかし、第1～3回の調査は、回を重ねる毎に調査項目を増やしたため、出現種の増加はこうした背景も踏まえて考える必要がある。

第1回目だけに記録された種はムナグロ1種、第2回目だけに記録された種はイカルチドリ1種であった。第3回目だけに記録された種は、カンムリカイツブリ、ヨシゴイ、アマサギ、ヨシガモ、シマアジ、ハシビロガモ、アカハジロ、ノスリ、キジ、コアジサシ、ツツドリ、アオバズク、アカゲラ、ルリビタキ、トラツグミ、オオルリの16種であった。

今回の調査ではツミが記録された。ツミは、近年、市街地などにも進出してきており、板橋区でもこうした傾向がみられたと考えられる。

本調査の結果には、資料調査等で得られた新河岸川付近でのシギ・チドリ類の記録があり、第1回調査で確認された後、第2回、第3回調査で記録の少なかったチドリ目チドリ科及びシギ科の鳥類の記録がやや回復したことになった。これらの鳥類に第2回、第3回調査で衰退傾向がみられたのは、護岸工事や乾燥地化などによる生息環境の悪化に起因する（板橋区 1993）ものと考えられている。

表V-4 板橋区出現鳥類の変化

目	科	種	1982 年度	1987 年度	1992 年度	2001 年度	生活 季節	繁殖 リンク
カイツブリ	カイツブリ	カイツブリ		○	○		留冬	
ベリカン	ウ	カンムリカイツブリ			●		留冬	
コウノトリ	サギ	カワウ	○	○	○	○	留冬	
		ヨシゴイ			●		留冬	
		ゴイサギ	○	○	○		留冬	
		アマサギ			●		留冬	
		ダイサギ	○	○	○		留冬	
		コサギ	○	○	○		留冬	
		アオサギ			○	○	留冬	
カモ	カモ	マガモ	○	○	○		留冬	
		カルガモ	○	○	○	○	留冬	a
		コガモ	○	○	○		留冬	
		ヨシガモ			●		留冬	
		ヒドリガモ	○	○	○		留冬	
		オナガガモ	○	○	○		留冬	
		シマアジ			●		通冬	
		ハンビロガモ			●		通冬	
		ホシハジロ	○	○	○		通冬	
		アカハジロ			●		通冬	
		キンクロハジロ	○	○	○		通冬	
		スズガモ	○			(○)	通冬	
タカ	タカ	オオタカ	○			○	留冬	
		ツミ				●	留冬	c
		ノスリ			●		留冬	
		サシバ	○			(○)	通冬	
	ハヤブサ	ハヤブサ	○			(○)	通冬	
		チョウゲンボウ	○	○	○		留冬	
キジ	キジ	キジ			●		留冬	
ツル	クイナ	バン	○		○		留冬	
チドリ	チドリ	コチドリ	○	○		(○)	留冬	
		イカルチドリ		●			留冬	
		シロチドリ	○	○	○		留冬	
		メダイチドリ	○			(○)	留冬	
		ムナグロ	●				留冬	
	シギ	オオハシシギ	○			(○)	留冬	
		キアシシギ	○			(○)	留冬	
		イソシギ	○	○	○		留冬	
		ソリハシシギ	○			(○)	留冬	
		タシギ		○		(○)	留冬	
		オオジシギ	○	○		(○)	留冬	
	カモメ	ユリカモメ	○	○	○	○	留冬	
		セグロカモメ	○	○	○		留冬	
		ウミネコ	○	○	○		留冬	
		コアシサシ			●		留冬	
ハト	ハト	キジバト	○	○	○	○	留冬	a
カッコウ	カッコウ	カッコウ	○			(○)	留冬	
		ツツドリ			●		留冬	
フクロウ	フクロウ	アオバズク			●		留冬	
ブッポウソウ	カワセミ	カワセミ			○	○	留冬	b
キツツキ	キツツキ	アオゲラ		○		○	留冬	
		アカゲラ			●		留冬	
		コゲラ		○	○	○	留冬	b
スズメ	ヒバリ	ヒバリ	○	○	○		留冬	

表V-4 板橋区出現鳥類の変化 (続き)

目	科	種	1982 年度	1987 年度	1992 年度	2001 年度	生活 季節	繁殖 ラック
	ツバメ	ツバメ	○	○	○	○	夏留	b
		イワツバメ	○	○	○	○	留	c
	セキレイ	キセキレイ	○	○	○	○	冬留	
		ハクセキレイ	○	○	○	○	冬留	
		セグロセキレイ	○	○	○		冬留	
		タヒバリ	○	○	○		冬留	
	ヒヨドリ	ヒヨドリ	○	○	○	○	冬留	b
	モズ	モズ	○	○	○	○	冬留	
	ツグミ	ルリビタキ			●		冬留	
		ジョウビタキ	○	○	○	○	冬留	
		ノビタキ		○	○		冬通	
		トラツグミ			●		冬通	
		アカハラ	○	○	○		冬留	
		シロハラ	○	○	○	○	冬留	
		マミチャジナイ				○	冬通	
		ツグミ	○	○	○	○	冬通	
	ウグイス	ウグイス	○	○	○	○	冬通	
		コヨシキリ		○	○		夏通	
		オオヨシキリ	○	○	○		夏通	
		メボソムシクイ		○	○		夏通	
		センダイムシクイ		○	○		夏通	
		セッカ	○	○	○		夏通	
		キビタキ		○	○		夏通	
		オオルリ			●		夏通	
		エゾビタキ	○	○	○		夏通	
		コサメビタキ		○	○		夏通	
	シジュウカラ	シジュウカラ		○		○	冬留	
		ヒガラ		○	○		冬留	
		ヤマガラ		○	○		冬留	
		シジュウカラ	○	○	○	○	冬留	a
	メジロ	メジロ	○	○	○	○	冬留	b
	ホオジロ	ホオジロ	○	○	○		冬留	
		カシラダカ	○	○	○		冬留	
		アオジ	○	○	○	○	冬留	
		オオジュリン	○	○	○		冬留	
	アトリ	カワラヒワ	○	○	○	○	冬留	c
		シメ	○	○	○	○	冬留	
	ハタオリドリ	スズメ	○	○	○	○	冬留	a
	ムクドリ	コムクドリ		○		○	冬留	
		ムクドリ	○	○	○	○	冬留	a
	カラス	カケス	○		○		冬留	
		オナガ	○	○	○	○	冬留	c
		ハシボソガラス	○	○	○		冬留	
		ハシブトガラス	○	○	○	○	冬留	a
		コジュケイ	○	○	○		冬留	
		ドバト	○	○	○	○	冬留	c
各調査回でのみ記録された種			1種	1種	16種	1種		
合計			64種	67種	80種	44種		

○：確認種 ●：各調査回でのみ記録された種 ()：調査範囲外のみでの記録

留：留鳥 夏：夏鳥 冬：冬鳥 通：通過鳥

a：繁殖を確認した

b：生息を確認したが、繁殖についてはなんともいえない

c：繁殖を確認できなかったが、繁殖の可能性はある

※2001年度については、6月と1月のみに調査を実施した。これに笹川（私信）の記録を追加し



写真V-1 本調査で新たに記録されたツミ

2) 崖線樹林地の鳥類相の変化

今回の調査は板橋区の緑の骨格を構成する崖線樹林地を対象に実施し、10目23科44種の鳥類が記録された。この鳥類相を、過去に記録されている鳥類相と比較してみる。

これまでに行われた調査のうち、第1回調査(1982年度)は本調査の範囲との比較に十分な記録がないため、区内全域の記録がある第2回調査(1987年度)、第3回調査(1992年度)の結果を利用し、比較を行った。これらの調査は、地域標準メッシュで記録を整理しており、本調査の範囲とは若干、合致しない箇所もあったが、図IV-1(前掲)に示す範囲から記録の抽出を行った。

ただし、第2回調査、第3回調査では、繁殖期は5、6、7月に、越冬期は12、1、2月に調査を行っているのに対し、本調査では繁殖期は6月、越冬期は1月のみの調査である。これらの点を踏まえたうえで、崖線樹林地における出現鳥類を表V-5に示し、鳥類相の変化を検討した。

崖線樹林地で記録された出現鳥類は、第2回調査は33種、第3回調査は44種、本調査は31種で、合計10目24科51種であり、第3回調査の出現鳥類が多かった。

崖線の樹林地だけに限った場合、第2回調査だけに記録された種は、ホオジロ1種、第3回調査だけに記録された種は、コガモ、ヒドリガモ、コガモ、アオバズク、セグロセキレイ、ルリビタキ、オオヨシキリ、キビタキ、ヤマガラ、カケスの10種であった。本調査だけに記録された種は、アオサギ、オオタカ、ツミ、カワセミ、マミチャジナイの5種であった。第3回目調査だけに記録があったカモ類は、崖線の樹林を含むメッシュの一部に新河岸川等の広い水域を含むメッシュがあり、河川に生息しているカモ類や通過個体が記録されたとみられる。

また、本調査だけに記録のあったオオタカ、ツミ、カワセミは、近年、都会の公園などでも記録されるようになった鳥類であり、板橋区でもこうした傾向がみられたと考えられる。

表 V-5 崖線樹林地の出現鳥類の変化

目	科	種数合計	1987	1992	2001
			年度	年度	年度
ベリカン	ウ	カワウ	○	○	○
コウノトリ	サギ	ダイサギ	○	○	
		アオサギ			●
カモ	カモ	カルガモ	○	○	○
		コガモ		●	
		ヒドリガモ		●	
		オナガガモ		●	
		キンクロハジロ	○	○	
タカ	タカ	オオタカ			●
		ツミ			●
	ハヤブサ	チョウゲンボウ	○	○	
チドリ	カモメ	ユリカモメ	○	○	○
		セグロカモメ	○	○	
ハト	ハト	キジバト	○	○	○
フクロウ	フクロウ	アオバズク		●	
ブッポウソウ	カワセミ	カワセミ			●
キツツキ	キツツキ	コゲラ	○	○	○
スズメ	ヒバリ	ヒバリ	○	○	
	ツバメ	ツバメ	○	○	
		イワツバメ	○	○	○
	セキレイ	キセキレイ		○	○
		ハクセキレイ	○	○	○
		セグロセキレイ		●	
	ヒヨドリ	ヒヨドリ	○	○	○
	モズ	モズ	○	○	○
	ツグミ	ルリビタキ		●	
		ジョウビタキ	○	○	○
		トラツグミ		○	
		アカハラ	○	○	
		シロハラ		○	○
		マミチャジナイ※			●
		ツグミ	○	○	○
	ウグイス	ウグイス	○	○	○
		オオヨシキリ		●	
		キビタキ		●	
	シジュウカラ	コガラ※	○		○
		ヤマガラ		●	
		シジュウカラ	○	○	○
	メジロ	メジロ	○	○	○
	ホオジロ	ホオジロ	●		
		アオジ	○	○	○
	アトリ	カワラヒワ	○	○	○
		シメ	○	○	○
	ハタオリドリ	スズメ	○	○	○
	ムクドリ	ムクドリ	○	○	○
	カラス	カケス		●	
		オナガ	○	○	○
		ハシボソガラス	○	○	
		ハシブトガラス	○	○	○
		コジュケイ	○	○	
		ドバト	○	○	○
各調査回のみで記録された種			1種	10種	5種
合計 10目24科51種 種数合計			33種	44種	31種

○：確認種

●：各調査回でのみ記録された種

※：2001年度については、笹川（私信）の記録を追加した

2 鳥類群集

本調査では、個体数の把握を越冬期調査時にカウント調査で行った。カウントはおおむね時速2km程度で歩行しながら、出会った個体を記録したもので、重複カウントの排除に心がけたが、ラインセンサス調査ほど厳密には行っていない。

表V-6には、カウント調査で記録された結果を、地区別に示した。本調査で記録された鳥類は、23種783個体であった。記録個体数では、ドバト、ヒヨドリ、スズメ、ムクドリ、キジバト、シジュウカラ等が上位に入ったが、これらの鳥類相は、比較的緑の多い市街地の代表的な構成種である。

東地区では、21種、189個体が記録された。記録個体数の上位は、ヒヨドリ、ドバト、キジバト、シジュウカラ、メジロなどで、やはり市街地の樹林や植栽地でよくみられる構成種である。

西地区では、19種、594個体が記録された。記録種の上位は、ドバトが圧倒的に優占し、以下、スズメ、ムクドリが続いている。これらの種は、赤塚公園内で餌を与える人がいるなどの理由で集団が居着いているものとみられる。このほかの構成種は、おおむね東地区と共通していた。

表V-6 カウント調査結果

種名	西地区	東地区	合計
ドバト	304	22	326
ヒヨドリ	32	35	67
スズメ	56	6	62
ムクドリ	45	4	49
キジバト	25	22	47
シジュウカラ	24	20	44
オナガ	29	11	40
ハシブトガラス	19	11	30
メジロ	10	13	23
シメ	11	7	18
ツグミ	12	6	18
アオジ	5	4	9
ウグイス	6	3	9
カワウ	0	9	9
ハクセキレイ	5	3	8
カワラヒワ	3	3	6
コゲラ	1	4	5
シロハラ	5	0	5
ユリカモメ	0	3	3
ジョウビタキ	1	1	2
オオタカ	1	0	1
キセキレイ	0	1	1
モズ	0	1	1
合計	594	189	783

3 繁殖状況

3-1 本年度の繁殖状況

1) 繁殖可能性

本調査で繁殖期に確認された鳥類は18種で、構成種は主にツバメやスズメのような市街地に生息する種や、コゲラのような樹林に生息する種であり、このほかに少数ながらカルガモなどの水辺の鳥類も4種が記録された。この中から、繁殖に係わる行動の記録を整理し、繁殖の可能性を表V-7に整理した。繁殖の判定は、「種の多様性調査・鳥類生息分布調査（全国分布調査）（1997～1998年実施）」の繁殖の判定基準に基づいて行った。

「繁殖の確認」に該当する a ランクは、カルガモ、キジバト、シジュウカラ、スズメ、ムクドリ、ハシブトガラスの6種、「繁殖の可能性がある」に該当する b ランクは、カワセミ、コゲラ、ツバメ、ヒヨドリ、メジロの5種、「繁殖期に生息を確認したが、繁殖については何ともいえない」は、ツミをはじめとする5種であった。なお、カワウとアオサギは c ランクに区分されるが、営巣地（コロニー）がないため除外した。

各種の繁殖の判定に係わる観察事項及び確認メッシュは、表V-8～V-10に示す通りである。

表V-7 板橋区出現鳥類（繁殖期）

種名	現地調査	繁殖ランク
カワウ	○	
アオサギ	○	
カルガモ	○	a
ツミ	○	c
キジバト	○	a
カワセミ	○	b
コゲラ	○	b
ツバメ	○	b
イワツバメ	○	c
ヒヨドリ	○	b
シジュウカラ	○	a
メジロ	○	b
カワラヒワ	○	c
スズメ	○	a
ムクドリ	○	a
オナガ	○	c
ハシブトガラス	○	a
ドバト	○	c
*カラス科の一種	○	
合計	18種	

*：種数に含めない

a：繁殖を確認した

b：繁殖を確認できなかったが、繁殖の可能性はある

c：生息を確認したが、繁殖については何ともいえない

表V-8 繁殖確認シート (a ランク)

カルガモ		
ランク	観察事項	確認メッシュ
a	巣からほとんど移動していないと思われる巣立ちビナをみた。	29
キジバト		
ランク	観察事項	確認メッシュ
a	ヒナのいる巣をみた。	21
b	営巣し得る環境で繁殖期に、さえずりをきいた。	21, 30
	巣を発見したが、卵、ヒナともなく、成鳥が巣に来るのを認めなかった。ただし、巣は2001年に作られたものである。	21
シジュウカラ		
ランク	観察事項	確認メッシュ
a	巣からほとんど移動していないと思われる巣立ちビナをみた。	30
b	かなり移動可能と思われる巣立ちビナをみた。	21, 22, 25, 26, 27, 29, 30, 32
	営巣し得る環境で繁殖期に、さえずりをきいた。	22, 26, 29, 30, 33
スズメ		
ランク	観察事項	確認メッシュ
a	巣からほとんど移動していないと思われる巣立ちビナをみた。	27
b	かなり移動可能と思われる巣立ちビナをみた。	26, 30
ムクドリ		
ランク	観察事項	確認メッシュ
a	成鳥が巣あるいは巣のあるらしいところに繰り返し出入りし、ヒナの声がきかれた。	30
	巣からほとんど移動していないと思われる巣立ちビナをみた。	33
b	かなり移動可能と思われる巣立ちビナをみた。	25, 26, 30
ハシブトガラス		
ランク	観察事項	確認メッシュ
a	巣立ち後の巣がある。ただし、巣は2001年に使用されたものである。	22
b	かなり移動可能と思われる巣立ちビナをみた。	20, 25, 26, 29

表V-9 繁殖確認シート (b ランク)

カワセミ		
ランク	観察事項	確認メッシュ
b	巣を発見したが、卵、ヒナともなく、成鳥が巣に来るのを認めなかった。ただし、巣は2001年に作られたものである。	29
ユゲラ		
ランク	観察事項	確認メッシュ
b	巣を発見したが、卵、ヒナともなく、成鳥が巣に来るのを認めなかった。ただし、巣は2001年に作られたものである。	25, 26, 29
ツバメ		
ランク	観察事項	確認メッシュ
b	かなり移動可能と思われる巣立ちビナをみた。	25
ヒヨドリ		
ランク	観察事項	確認メッシュ
b	かなり移動可能と思われる巣立ちビナをみた。	21
メジロ		
ランク	観察事項	確認メッシュ
b	営巣し得る環境で繁殖期に、さえずりをきいた。	22, 25, 30

表V-10 繁殖確認シート (c ランク)

ツミ		
ランク	観察事項	確認メッシュ
c	営巣し得る環境で、繁殖期に確認したが、他には繁殖の徴候が認められな	20, 21
イワツバメ		
ランク	観察事項	確認メッシュ
c	営巣し得る環境で、繁殖期に確認したが、他には繁殖の徴候が認められない。資料により、戸田橋新幹線のガード下で繁殖している情報を得たが、本調査の調査範囲外であるため、cランクとした。	25, 32
カワラヒワ		
ランク	観察事項	確認メッシュ
c	営巣し得る環境で、繁殖期に確認したが、他には繁殖の徴候が認められない。	20, 21, 25, 29, 30, 32
オナガ		
ランク	観察事項	確認メッシュ
c	営巣し得る環境で、繁殖期に確認したが、他には繁殖の徴候が認められな	26, 29, 30
ドバト		
ランク	観察事項	確認メッシュ
c	営巣し得る環境で、繁殖期に確認したが、他には繁殖の徴候が認められない。	20, 21, 22, 25, 26, 27, 29, 30, 32, 33

地区別の記録（表V-11）をみると、共通して記録された鳥類は 13 種、西地区だけで記録された鳥類はアオサギ、イワツバメの 2 種、東地区だけで記録された鳥類はカルガモ、ツミ、カワセミの 3 種であった。この中で、西地区のアオサギとイワツバメは飛翔通過の個体の記録と考えられる。

表V-11 地区別出現鳥類（繁殖期）

	地区	
	西	東
各地区のみでの記録	アオサギ、イワツバメ	カルガモ、ツミ、カワセミ
共通の記録	カワウ、キジバト、コゲラ、ツバメ、ヒヨドリ、シジュウカラ、メジロ、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、オナガ、ハシブトガラス、ドバト、カラス科の一種	

2) 資料等による繁殖状況の検討

本調査で、「繁殖の確認」の a ランク及び「繁殖の可能性がある」の b ランクに該当する 11 種について、「東京都の鳥類繁殖状況調査報告書（東京都 1998）」との比較を行った。

・カルガモ

本調査では、「繁殖を確認した」の a ランクに評価されている。東京都繁殖調査によると、板橋区内では荒川流域で繁殖が確認されており、本調査で確認された地点（21 メッシュ）は、「繁殖については何とも言えない」と評価されている地点であった。本調査で繁殖を確認した地点は、池も小さく、人の利用もみられる場所であった（写真V-2）。



写真V-2 カルガモの親子

・キジバト

本調査では、「繁殖を確認した」の a ランクに評価され（21 メッシュ）、この他にさえずりや巣が観察されている（21、30 メッシュ）。東京都繁殖調査によると、板橋区内では崖線樹林地において広く繁殖が確認されており、本調査で確認した地点は「確実に繁殖している」、「たぶん繁殖している」と評価されている。本種は、崖線樹林地には広く分布し、他の地点でも繁殖しているとみられる。

・シジュウカラ

本調査では、「繁殖を確認した」の a ランクに評価され (30 メッシュ)、この他に繁殖の徴候を示す行動等が数多く記録された (21、22、25、26、27、29、30、32、33 メッシュ)。東京都繁殖調査によると、板橋区内では崖線樹林地の中央部において、「確実に繁殖をしている」、「繁殖については何とも言えない」と評価されている。よって、東京都繁殖調査より広範囲で繁殖の兆候が記録され、崖線樹林地で広く繁殖しているとみられる。

・スズメ

本調査では、「繁殖を確認した」の a ランクに評価され (27 メッシュ)、この他にかなり移動可能と思われる巣立ちビナも観察されている (26、30 メッシュ)。東京都繁殖調査によると、板橋区内では、崖線樹林地で広く、「確実に繁殖している」、「繁殖の可能性あり」と評価されている。本調査では、繁殖の徴候を示す行動が得られた地点が少なかったが、崖線樹林地周辺の人家や人工構造物などで繁殖しているとみられる。

・ムクドリ

本調査では、「繁殖を確認した」の a ランクに評価され (30、33 メッシュ)、その他にかなり移動可能と思われる巣立ちビナが観察されている (25、26、33 メッシュ)。東京都繁殖調査によると、板橋区内では崖線樹林地の中央部、東部で「確実に繁殖している」、「繁殖の可能性あり」と評価されており、本調査の確認地点とほぼ一致している。

・ハシブトガラス

本調査では、「繁殖を確認した」の a ランクに評価され (27 メッシュ)、この他にかなり移動可能と思われる巣立ちビナも観察されている (20、25、26、29 メッシュ)。東京都繁殖調査によると、板橋区内では崖線樹林地の中央部で「確実に繁殖している」、東部、西部で「繁殖の可能性あり」、「繁殖については何とも言えない」と評価されている。本調査では、種の同定には至らなかったカラス科の一種の巣が崖線樹林地で広く観察されており、これらの中にはハシブトガラスの巣も含まれているものとみられる。

・カワセミ

本調査では、「繁殖の可能性がある」の b ランクに評価された (29 メッシュ)。東京都繁殖調査によると、板橋区内では荒川流域で「繁殖については何とも言えない」と評価されており、本調査で確認された地点は、新たな記録である。東京都では、1960 年代には極めて減少したものの、1980 年代には復活し、都心の公園で見られるようになっていく (東京都の鳥類繁殖状況調査報告書 (1998))。板橋区でも、こうした傾向がみられたと考えられる。

・コゲラ

本調査では、「繁殖の可能性がある」のbランクに評価された(25、26、29メッシュ)。東京都繁殖調査によると、崖線緑地の中央部で「確実に繁殖している」、「たぶん繁殖している」と評価されており、本調査で確認された地点では、繁殖に係わる記録は確認されていない。本種は、かつては丘陵地から山地に生息していたが、1980年代に都心への進出が確認され、区部の公園でも普通に見られるようになり、分布を拡大している(東京都の鳥類繁殖状況調査報告書(1998))。板橋区でも、分布及び繁殖分布を拡大しているものとみられる。

・ツバメ

本調査では、「繁殖の可能性がある」のbランクに評価された(25メッシュ)。東京都繁殖調査によると、崖線樹林地の中央～東部で「繁殖の可能性あり」、「確実に繁殖している」と評価されている。本調査では、樹林を中心に調査を行い、巢の確認には至らなかったが、本種は人家や人工物に営巣するため、崖線樹林地周辺の人家等に繁殖しているとみられる。

・ヒヨドリ

本調査では、「繁殖の可能性がある」のbランクに評価された(21メッシュ)。東京都繁殖調査によると、崖線樹林地の中央部で「確実に繁殖している」、「たぶん繁殖している」、東部で「繁殖の可能性あり」と評価されている。本調査で、繁殖の徴候がみられた地点は、東京都繁殖調査でも「確実に繁殖している」と評価された地点である。崖線樹林地には広く分布しており、本調査では確認できなかったが、普通に繁殖しているものとみられる。

・メジロ

本調査では、「繁殖の可能性がある」のbランクに評価された(22、25、30メッシュ)。東京都繁殖調査によると、崖線樹林地の中央部で「確実に繁殖している」、「たぶん繁殖している」、「繁殖については何ともいえない」と評価されている。本調査で繁殖の徴候がみられた地点は、東京都繁殖調査では繁殖の徴候がみられていない場所であった。

3) 営巣地

本調査では、ハシブトガラス、キジバト、コゲラ、カワセミ、ムクドリ、カラス科の一種の巣が確認された。また、巣立ち間もない雛をつれたカルガモの家族群がいた池も、営巣の確認に準ずる繁殖場所とした。確認された巣の位置及び確認状況は図V-3、表V-12に示す通りである。

ハシブトガラス、カラス科の一種は崖線、神社、公園、集合住宅等の主に大径木を利用して架巢していた。樹種はタブノキ、クスノキであった。

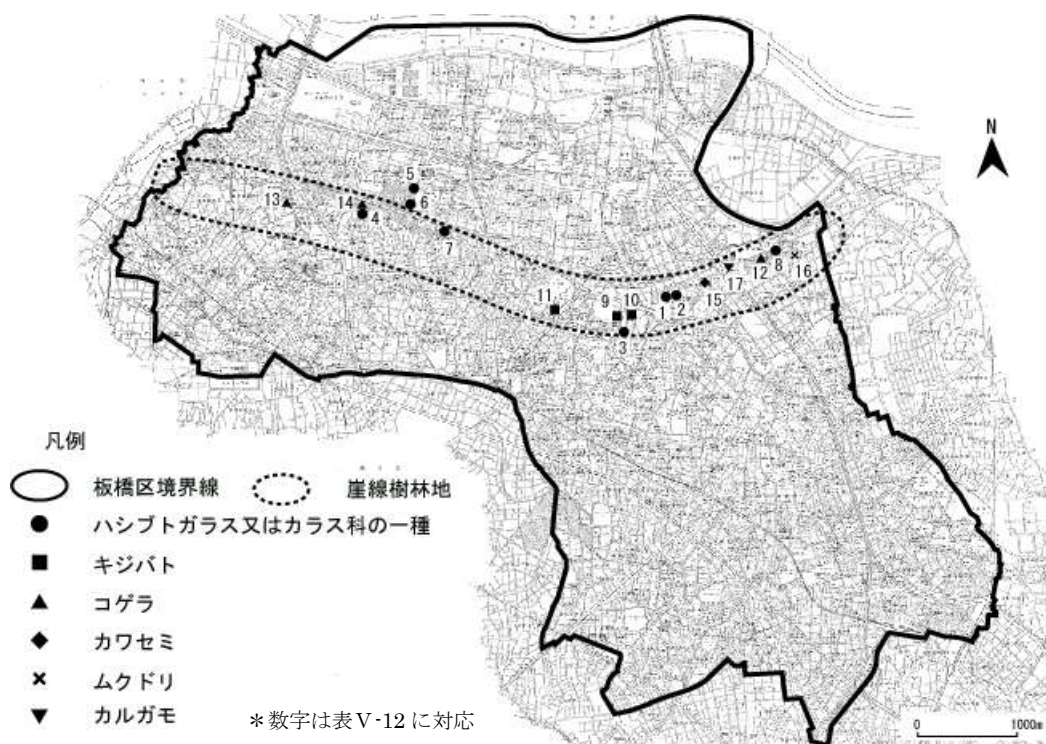
コゲラは、崖線、公園のサクラ、コナラ等の大径木にある、枯れた枝等に巣穴が確認された。

キジバトは、個人住宅や集合住宅の植栽樹に架巢していた。

カワセミは、照葉樹と落葉広葉樹の混交林の崖で巣穴が確認された。

ムクドリは、個人住宅の戸袋で営巣していた。

カルガモは、薬師の泉庭園内の小さな池で繁殖したとみられた。



図V-3 確認された巣の位置

表 V-12 巣の確認状況

No.	種名	確認日	樹種 (環境)	備考
1	ハシブトガラス	2001年6月5日	タブノキ	ヒナが落ちて死んでいた 樹高≒16m 胸高直径≒50cm 架巢高≒14m
2	カラス科の一種	2001年6月5日	タブノキ	樹高≒13m 胸高直径≒25+cm 架巢高≒12m
3	カラス科の一種	2001年6月5日	クスノキ	樹高≒8m 胸高直径≒35+cm 架巢高≒6m
4	カラス科の一種	2001年6月8日	クスノキ	樹高≒16m 胸高直径≒40cm 架巢高≒14m
5	カラス科の一種	2001年6月8日	クスノキ	ハンガー入り 樹高≒18m 胸高直径≒45cm 架巢高≒16m
6	カラス科の一種	2001年6月8日	クスノキ	ハンガー入り 樹高≒17m 胸高直径≒25cm 架巢高≒14m
7	カラス科の一種	2001年6月8日	クスノキ	ハンガー、ビニール入り 樹高≒12m 胸高直径≒50cm 架巢高≒11m
8	カラス科の一種	2001年1月11日	タブノキ	樹高≒11m 胸高直径≒30cm 架巢高≒10m
9	キジバト	2001年6月5日	サンゴジュ	樹高≒5m 胸高直径≒15+cm 架巢高≒4m
10	キジバト	2001年6月5日	プラタナス	樹高≒8m 胸高直径≒30+cm 架巢高≒4m
11	キジバト	2001年6月5日	コナラ	巢内にヒナ2個体を確認 樹高≒5m 胸高直径≒10+cm 架巢高≒4m
12	コゲラ	2001年6月5日	サクラ	樹高≒15m 胸高直径≒40±cm 架巢高≒8m 巢穴直径≒3.5cm
13	コゲラ	2001年6月8日	コナラ	樹高≒16m 胸高直径≒20cm 架巢高≒6m
14	コゲラ	2001年6月8日	落葉広葉樹	樹高≒20m 胸高直径≒40cm 架巢高≒12m
15	カワセミ	2001年6月5日	照葉樹・落葉広葉樹の 混交林のがけ	—
16	ムクドリ	2001年6月5日	個人住宅の戸袋	落葉樹・大径木林から 餌をくわえていった 住宅、巢の中からヒナの 声が聞こえる
17	カルガモ	2001年6月5日	薬師の泉庭園の池	巣立ち後まもなく、移動 していないとみられるヒ ナ8個体を含む家族群

3-2 繁殖状況の変化

繁殖状況の変化は、地区毎の繁殖の記録がほぼ共通して整理できた、第3回調査（1992年度）と今回の調査によって比較し、表V-13に示した。ただし、第3回調査では、繁殖期調査を4、5、6月に行っているのに対し、本調査は留鳥の多くが繁殖を終えている6月に行っただけであることや、第3回調査は、メッシュ全体を対象としているため調査範囲が広いことなど、調査内容上の差が含まれていることを付け加える必要がある。

繁殖鳥の種数をみると、第3回調査がやや多いが、これは、留鳥の繁殖の盛期が過ぎていることや調査範囲の違いによるものと考えられる。

本調査で注目される記録としては、繁殖の確認には至らなかったものの、繁殖期にツミが記録された点が挙げられる。本種は、近年都市公園などで繁殖し、その分布を市街地に拡大している傾向がみられる種であり、板橋区でもいずれ繁殖が確認される期待がもたれる。

表V-13 繁殖状況の変化

No.	種名	1992年度		2001年度	
		西	東	西	東
1	カルガモ	c	b		a
2	ツミ				c
3	チョウゲンボウ	c			
4	キジバト	b	a	c	a
5	カワセミ				b
6	コゲラ	a	a	b	b
7	ヒバリ		b		
8	ツバメ	a	a	b	c
9	イワツバメ	a	b	c	
10	ヒヨドリ	b	b	c	b
11	オオヨシキリ	b			
12	シジュウカラ	a	a	a	b
13	メジロ	a	b	b	b
14	カワラヒワ	b	b	c	c
15	スズメ	a	a	a	b
16	ムクドリ	a	a	a	a
17	オナガ	a	c	c	c
18	ハシボソガラス	b			
19	ハシブトガラス	a	a	b	a
20	コジュケイ	b	b		
21	ドバト	c	b	c	c
種数合計		18	16	13	15

a：繁殖を確認した

b：繁殖を確認できなかったが、繁殖の可能性はある

c：生息を確認したが、繁殖についてはなんともいえない

4 越冬状況

4-1 越冬期の鳥類相

本調査の現地調査で越冬期に確認された鳥類は、表V-14に示したように、23種である。これに、資料調査等で記録された鳥類のうち、確認された場所や確認時期が現地調査と一致したマミチャジナイとコガラの2種を加えると25種の鳥類が記録されたことになる。

記録された種の生活季節別の種数は、留鳥が12種、冬鳥が11種、通過鳥が2種であった。留鳥は市街地に主として生息するキジバト、ヒヨドリ、スズメ、ムクドリ、ハシブトガラスなどが記録された。冬鳥は、モズ、ジョウビタキ、ツグミ、アオジ、シメ等の林縁から草地に生息する種、シロハラのように薄暗い林内に生息する種、樹林を中心にその周辺で狩りをするオオタカなど、樹林に依存する種が主体であった。そのほかには、隣接する新河岸川などの水系に依存しているとみられるカワウやユリカモメ等が記録された。

地区別の記録(表V-15)をみると、共通して記録された鳥類は17種、西地区だけで記録された鳥類はオオタカ、シロハラ、コガラの3種、東地区だけで記録された鳥類はユリカモメ、キセキレイ、モズ、マミチャジナイの4種であった。

表V-14 板橋区出現鳥類（越冬期）

種名	現地調査	資料等	生活季節
カワウ	○		留
オオタカ	○		冬
ユリカモメ	○		冬
キジバト	○		留
コゲラ	○		留
キセキレイ	○		冬
ハクセキレイ	○		冬
ヒヨドリ	○		留
モズ	○		冬
ジョウビタキ	○		冬
シロハラ	○		冬
マミチャジナイ※		○	通
ツグミ	○		冬
ウグイス	○		冬
コガラ※		○	通
シジュウカラ	○		留
メジロ	○		留
アオジ	○		冬
カワラヒワ	○		留
シメ	○		冬
スズメ	○		留
ムクドリ	○		留
オナガ	○		留
ハシブトガラス	○		留
ドバト	○		留
*カラス科の一種	○		
合計			25種

*：種数に含めない

留：留鳥 冬：冬鳥 通：通過鳥

※：資料等は笹川（私信）の記録

表V-15 地区別出現鳥類（越冬期）

	地区	
	西	東
各地区のみでの記録	オオタカ、シロハラ、コガラ※	ユリカモメ、キセキレイ、モズ、マミチャジナイ※、カラス科の一種
共通の記録	キジバト、コゲラ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ジョウビタキ、ツグミ、ウグイス、シジュウカラ、メジロ、アオジ、カワラヒワ、シメ、スズメ、ムクドリ、オナガ、ハシブトガラス、ドバト	

※：笹川（私信）の記録

4-2 越冬期の経年変化

分布調査の結果から越冬期の地区別の記録が抽出できた、第2回調査(1987年度)、第3回調査(1992年度)及び本調査の結果を、表V-16に整理した。これまでに行われてきた調査と、本調査とでは調査内容が異なることは前述したとおりなので、ここでは、本調査で新たに注目された記録を取り上げた。

本調査で新たに、オオタカ、キセキレイ、マミチャジナイ、コガラが記録された。

オオタカは、これまで第1回調査(1982年度)時に、志村1丁目で2月に1例の記録があるだけである。本調査では赤塚公園の崖線樹林付近で、急降下する個体と、血の付いたドバトの羽の散乱が確認されたために、オオタカがハンティングを行った可能性が高いといえる。オオタカについては、この1例の記録だけであるが、周辺部には多数のドバト、ムクドリ、キジバトが記録されており、赤塚公園の崖線樹林付近は、オオタカの越冬場所として、条件のよい場所と考えられる。

キセキレイは、板橋区内ではこれまでの調査でいずれも記録されてきている。

マミチャジナイとコガラは稀な記録(笹川 私信)である。

表V-16 越冬期の出現鳥類の変化

No.	種名	1987 年度	1992 年度	2001 年度
1	カワウ	○	○	○
2	カルガモ		●	
3	コガモ		●	
4	ヒドリガモ		●	
5	オナガガモ		●	
6	キンクロハジロ	○	○	
7	オオタカ			●
8	チョウゲンボウ		●	
9	ユリカモメ	○	○	○
10	セグロカモメ	○	○	
11	キジバト	○	○	○
12	コゲラ	○	○	○
13	ヒバリ	●		
14	キセキレイ			●
15	ハクセキレイ	○	○	○
16	セグロセキレイ		●	
17	ヒヨドリ	○	○	○
18	モズ	○	○	○
19	ルリビタキ		●	
20	ジョウビタキ	○	○	○
21	トラツグミ		●	
22	アカハラ	●		
23	シロハラ		○	○
24	マミチャジナイ※			●
25	ツグミ	○	○	○
26	ウグイス	○	○	○
27	コガラ※			●
28	ヤマガラ		●	
29	シジュウカラ	○	○	○
30	メジロ	○	○	○
31	ホオジロ	●		
32	アオジ	○	○	○
33	カワラヒワ	○	○	○
34	シメ	○	○	○
35	スズメ	○	○	○
36	ムクドリ	○	○	○
37	カケス		●	
38	オナガ	○	○	○
39	ハシボソガラス		●	
40	ハシブトガラス	○	○	○
41	コジュケイ	●		
42	ドバト	○	○	○
*	カラス科の一種			●
種数合計		26	34	25

○：確認種

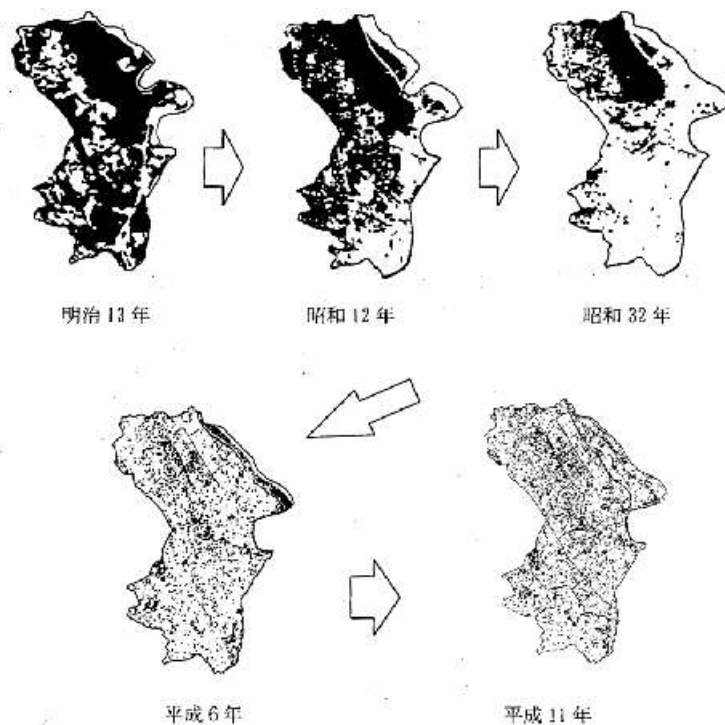
●：各調査回でのみ記録された種

*：種数に含めない。

※：2001年度については笹川（私信）の記録を追加した

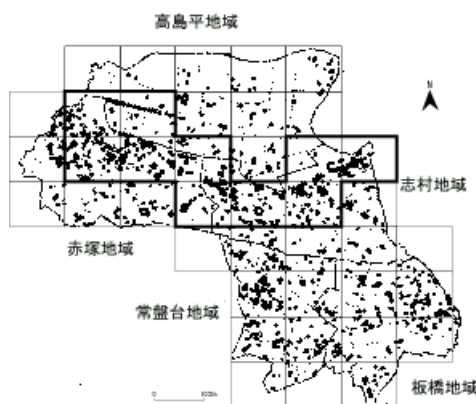
5 鳥類の生息状況からみた崖線樹林地の評価

図V-4のように板橋区では、年々都市化が進んでおり、1999年の緑被率は13.8%、樹木被覆地は区全体の7.6%と非常に少ない数字になっている(板橋区緑地・樹木の実態調査(VI)(板橋区 2000))。さらに、図V-5の大径木の分布をみてみると、区内では崖線樹林地に大径木が多く分布していることがわかる。崖線樹林地の保全は板橋区の緑地、樹林を保全していく上で、重要な課題である。



出典：板橋区緑地・樹木の実態調査(IV)(板橋区 2000)を一部改変

図V-4 緑被地の推移



出典：板橋区緑地・樹木の実態調査(IV)(板橋区 2000)を一部改変

図V-5 大径木の分布状況

本調査では、崖線樹林地の鳥類の生息状況を調査したが、多くの鳥類が生息できる環境があるということは、よい樹林があるということができる。

しかし、樹林の林床部分をみてもと樹林の階層構造が多様な場所から、階層構造が失われていたり、アズマネザサが密集してしまっている場所など、様々な形態にある。こうした環境は鳥類にとって、利用のしやすさや食物の多様性の違いをもたらしていると考えられる。

そこで、表IV-17に示したように樹林内の環境と、地表付近にいた鳥類の観察個体数を整理し、比較のため、樹林の周辺や公園内などにみられる、開けた環境での地表付近の鳥類の利用環境を合わせて示した。

検討に用いることができた記録が少なく、結果は明瞭ではなかったものの、その結果、記録された鳥類は、おおむね樹林へ強く依存するグループ、樹林と開けた環境をいずれも利用するグループ、主に開けた環境を利用するグループの3つに分かれる傾向を示した。樹林の利用傾向をみると、階層構造が維持され、「高木林内で、中低木が常緑で林床がすいている」という環境区分において、顕著に利用の集中がみられた。一般に都市公園では、防犯上の理由などから林内の見通しをよくするため、中低木の極度の剪定を行ったり、利用者の踏圧によって、中低木がなくなるといったことがみられる。しかし、本調査の検討からこういったことは鳥類の生息状況や生態系の多様性を考えるうえで好ましいことではないといえる。よって、これまでの管理の手法に加え、生態系の配慮を行うことで、より豊かな緑地の整備が可能になると考えられる。

現地調査で鳥類が多く見られた環境は、上記に示したように崖線樹林地の中でも中低木が常緑で林床がすいている場所であり（写真V-3）、アズマネザサが密生している様な場所ではあまり見られなかった（写真V-4）。一方、公園等の開けた芝生地や裸地では、給餌などの要因によりドバトやスズメが集まっていた（写真V-5）。

このほか、崖線樹林地への人の出入りを管理し、踏圧の影響を減らすことも必要である。また、崖線樹林地と周辺の公園、農地の緑をつなぐような緑地（コリドー）の育成を行うことも重要と考えられる。

さらに、管理は地域の住民の協力を得て行っていくことが望ましいが、それを指導する人材の育成やバックアップの体制も求められる。

表V-17 鳥類の利用による樹林環境の評価

種名	樹林内の林床への依存度	樹林内			小計	開けた環境			小計	その他	合計	
		高木林内で、高下層が常緑で林床がすいている	高木林内で、中低木が常緑で林床がすいている	高木林内で、林床がアズマネザサで覆われている		明るい草地・やぶ	管理により刈りされている芝生を含む	利用圧（踏圧）等により裸地化している道路なども含む				
メジロ	↑ 高い ↓ 低い		2		2					21	23	
シジュウカラ			8		8					36	44	
シロハラ			4		4					1	5	
オナガ			18		18					22	40	
シメ		1	4		5		2		2	11	18	
ツグミ		1	3		5	1	6		1	8	18	
キジバト		2	23		25		2		1	3	19	47
ハシブトガラス		1	1		2					3	28	30
ムクドリ			15		15		20		20	14	49	
ウグイス		3	2		7	2				2	9	
アオジ			2		2		2			2	5	9
ジョウビタキ							1			1	1	2
カワラヒワ							3			3	3	6
ヒヨドリ							1		3	4	63	67
スズメ							14		8	22	40	62
ドバト							86		149	235	91	326
キセキレイ									1	1	1	1
ハクセキレイ									4	4	4	8
モズ										1	1	
コゲラ										5	5	
オオタカ										1	1	
カワウ										9	9	
ユリカモメ										3	3	
合計		8	82	3	93	6	132	167	305	385	783	



写真V-3 高木林内で、中低木が常緑で林床がすいている



写真V-4 高木林内で、林床がアズマネザサで覆われている



写真V-5 管理により草刈りされている

参考文献

- 板橋区. 1983. 板橋区野鳥の実態調査報告書. (財) 日本野鳥の会. 79pp.
- 板橋区. 1988. 板橋区野鳥の実態調査報告書. (財) 日本野鳥の会. 87pp.
- 板橋区. 1993. 板橋区野鳥の実態調査報告書. (財) 日本野鳥の会. 144pp.
- 板橋区. 1998. いたばしグリーンプラン' 98. 102pp.
- 板橋区. 2000. 板橋区緑地・樹木の実態調査 (VI) . (株) 国際航業. 102pp.
- 東京都環境保全局. 1998. 東京都鳥類繁殖状況調査報告書 (平成 5～9 年度) . 108pp
- 日本鳥学会. 2000. 日本鳥類目録改訂第 6 版. 345pp.
- (社) 日本造園学会. 2001. 日本造園学会誌ランドスケープ研究 65(2), 「板橋サンシティ」
コミュニティ・ランドスケープの計画と育成, 有賀一郎. 105-112pp.
- 笹川喜久夫 (私信)

資料-1 鳥類目録

カイツブリ目 PODICIPEDIFORMES

カイツブリ科 Podicipedidae

カイツブリ *Tachybaptus ruficollis*

カンムリカイツブリ *Podiceps cristatus*

ペリカン目 PELECANIFORMES

ウ科 Phalacrocoracidae

カワウ *Phalacrocorax carbo*

コウノトリ目 CICONIIFORMES

サギ科 Ardeidae

ヨシゴイ *Ixobrychus sinensis*

ゴイサギ *Nycticorax nycticorax*

アマサギ *Bubulcus ibis*

ダイサギ *Egretta alba*

コサギ *Egretta garzetta*

アオサギ *Ardea cinerea*

カモ目 ANSERIFORMES

カモ科 Anatidae

マガモ *Anas platyrhynchos*

カルガモ *Anas poecilorhyncha*

コガモ *Anas crecca*

ヨシガモ *Anas falcata*

ヒドリガモ *Anas penelope*

オナガガモ *Anas acuta*

シマアジ *Anas querquedula*

ハシビロガモ *Anas clypeata*

ホシハジロ *Aythya ferina*

アカハジロ *Aythya baeri*

キンクロハジロ *Aythya fuligula*

スズガモ *Aythya marila*

タカ目 FALCONIFORMES

資料一 鳥類目録 (続き)

タカ科 Accipitridae

オオタカ *Accipiter gentilis*

ツミ *Accipiter gularis*

ノスリ *Buteo buteo*

サシバ *Butastur indicus*

ハヤブサ科 Falconidae

ハヤブサ *Falco peregrinus*

チョウゲンボウ *Falco tinnunculus*

キジ目 GALLIFORMES

キジ科 Phasianidae

キジ *Phasianus colchicus*

ツル目 GRUIFORMES

クイナ科 Rallidae

バン *Gallinula chloropus*

チドリ目 CHARADRIIFORMES

チドリ科 Charadriidae

コチドリ *Charadrius dubius*

イカルチドリ *Charadrius placidus*

シロチドリ *Charadrius alexandrinus*

メダイチドリ *Charadrius mongolus*

ムナグロ *Pluvialis fulva*

シギ科 Scolopacidae

オオハシシギ *Limnodromus scolopaceus*

キアシシギ *Heteroscelus brevipes*

イソシギ *Actitis hypoleucos*

ソリハシシギ *Xenus cinereus*

タシギ *Gallinago gallinago*

オオジシギ *Gallinago hardwickii*

カモメ科 Laridae

ユリカモメ *Larus ridibundus*

セグロカモメ *Larus argentatus*

資料一1 鳥類目録 (続き)

ウミネコ *Larus crassirostris*

コアジサシ *Sterna albifrons*

ハト目 COLUMBIFORMES

ハト科 Columbidae

キジバト *Streptopelia orientalis*

カッコウ目 CUCULIFORMES

カッコウ科 Cuculidae

カッコウ *Cuculus canorus*

ツツドリ *Cuculus saturatus*

フクロウ目 STRIGIFORMES

フクロウ科 Strigidae

アオバズク *Ninox scutulata*

ブッポウソウ目 CORACIIFORMES

カワセミ科 Alcedinidae

カワセミ *Alcedo atthis*

キツツキ目 PICIFORMES

キツツキ科 Picidae

アオゲラ *Picus awokera*

アカゲラ *Dendrocopos major*

コゲラ *Dendrocopos kizuki*

スズメ目 PASSERIFORMES

ヒバリ科 Alaudidae

ヒバリ *Alauda arvensis*

ツバメ科 Hirundinidae

ツバメ *Hirundo rustica*

イワツバメ *Delichon urbica*

資料一1 鳥類目録 (続き)

セキレイ科 Motacillidae

- キセキレイ *Motacilla cinerea*
- ハクセキレイ *Motacilla alba*
- セグロセキレイ *Motacilla grandis*
- タヒバリ *Anthus spinoletta*
- シロガシラ *Pycnonotus sinensis*

ヒヨドリ科 Pycnonotidae

- ヒヨドリ *Hypsipetes amaurotis*

モズ科 Laniidae

- モズ *Lanius bucephalus*

ツグミ科 Turdidae

- ルリビタキ *Tarsiger cyanurus*
- ジョウビタキ *Phoenicurus aureus*
- ノビタキ *Saxicola torquata*
- トラツグミ *Zoothera dauma*
- アカハラ *Turdus chrysolaus*
- シロハラ *Turdus pallidus*
- マミチャジナイ *Turdus obscurus*
- ツグミ *Turdus naumanni*

ウグイス科 Sylviidae

- ウグイス *Cettia diphone*
- コヨシキリ *Acrocephalus bistrigiceps*
- オオヨシキリ *Acrocephalus arundinaceus*
- メボソムシクイ *Phylloscopus borealis*
- センダイムシクイ *Phylloscopus coronatus*
- セッカ *Cisticola juncidis*
- キビタキ *Ficedula narcissina*
- オオルリ *Cyanoptila cyanomelana*
- エゾビタキ *Muscicapa griseisticta*
- コサメビタキ *Muscicapa dauurica*

シジュウカラ科 Paridae

- コガラ *Parus montanus*

資料-1 鳥類目録 (続き)

- ヒガラ *Parus ater*
ヤマガラ *Parus varius*
シジュウカラ *Parus major*
メジロ科 *Zosteropidae*
メジロ *Zosterops japonicus*
ホオジロ科 *Emberizidae*
ホオジロ *Emberiza cioides*
カシラダカ *Emberiza rustica*
アオジ *Emberiza spodocephala*
オオジュリン *Emberiza schoeniclus*
アトリ科 *Fringillidae*
カワラヒワ *Carduelis sinica*
シメ *Coccothraustes coccothraustes*
ハタオリドリ科 *Ploceidae*
スズメ *Passer montanus*
ムクドリ科 *Sturnidae*
コムクドリ *Sturnus philippensis*
ムクドリ *Sturnus cineraceus*
カラス科 *Corvidae*
カケス *Garrulus glandarius*
オナガ *Cyanopica cyana*
ハシボソガラス *Corvus corone*
ハシブトガラス *Corvus macrorhynchos*

コジュケイ *Bambusicola thoracica*
ドバト *Columba livia*

14 目 29 科 99 種

調査スタッフ

●現地調査

林 聡彦、今村真弓 (株) ネイテック

●資料協力

笹川喜久夫、武井 進 (財) 日本野鳥の会 東京支部

●報告書作成

監 修 金井 裕 (財) 日本野鳥の会 研究センター

本文・資料 林 聡彦 (株) ネイテック

今村真弓 (株) ネイテック

板橋区野鳥の実態調査（Ⅳ）報告書

2002年3月

発行：東京都板橋区土木部 みどりと公園課

東京都板橋区板橋 2-66-1

TEL 03-3579-2533

実施：財団法人 日本野鳥の会 研究センター

東京都日野市南平 2-35-2

TEL 042-593-6872
